

---

# IS あるオリ主の物語

tenoriushi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS あるオリ主の物語

### 【Nコード】

N6534Z

### 【作者名】

tenorishi

### 【あらすじ】

かつて篠ノ乃箒と出会っていたオリ主君が織斑一夏に続いてISを動かしてIS学園に入学というテンプレ展開の話。

本作は処女作・テンプレ・御都合主義・独自設定・独自解釈・作者の妄想青春などの要素が詰まっています。それらを考慮してお読みください。

## 第一話（前書き）

掲載されている皆様の作品を読ませて頂いて、投稿してみたくありませんでした。初めての投稿になりますが、よろしくお願ひします。この作品は独自の設定解釈があり、原作を読みながら書いているため、原作の文がそのまま使われている箇所があります。何か問題がある場合、すぐにご連絡ください。

批評・感想をお待ちしています。

## 第一話

「おお、まさか他にもイレギュラーが存在するとは」

「素晴らしい。これでわが国も」

「君にはいくつか選択肢があるが」

「君は今日から李明<sup>リメイ</sup>だ」

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー」

そう、目の前の女性の声で私の意識は焦点を現実に戻した。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

どうやら私は彼女の自己紹介を聞き逃していたらしいが、目の前の液晶画面には彼女がわがクラスの副担任であることと、彼女の名前が山田真耶であることが表示されていた。

なるほど、その低い身長と童顔が相まって同級生かと思っていたのだが、どうやら彼女は教員らしい。

このIS学園は、現代のあらゆる最先端とも言える場所なので施設は勿論、人材の方も優秀だと聞くので見た目と違って優秀なのだろう。

まあ、その優秀さが威厳には結びついていないのが何とも言えないが。

もしくは

「……………」

この妙な緊張感に包まれている教室の雰囲気<sup>雰囲気</sup>に吞まれているだけか。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。ええっと、出席番号順でお願いします」

うるたえながらも職務を遂行する山田教員には申し訳ないが、自己

紹介の前にこの教室の緊張感をどうにかして欲しかった。

まあそれも仕方ないのだろう。

何故ならこの教室、いや、このIS学園に男という例外が生徒として存在しているのだから。

この世界に10年前、突如として出現した白騎士と呼ばれるISインフィニット・ストラトス。

それは現代科学の結晶足る各国の軍隊や兵器をあっという間に駆逐し、世界にその存在を認知させた超技術オーバーテクノロジーを用いて作られた、正に現代最強の超兵器。

世界は驚愕した。それは下手な小国程度なら為す術もなく勝てるほどの戦力で当たってもIS一機に勝てないこともそうだったし、何より使われている技術が全くもって理解出来ないこともそれに拍車をかけた。

いや、理解は出来るがそれはSFの中だけの話だったものが現実に現れたからこそその衝撃だ。

当時は神が人間を裁くために使わした天使説やら宇宙人の侵略説、はたまた白騎士が最初に出現した日本の世界征服説等で随分騒がれたらしいが、その騒ぎは最終的にISを作ったと言われる篠ノ乃束博士の声明により収束し、その後爆発した。

その声明を要約すると『IS、特に白騎士は現代兵器を遙かに凌駕する究極の機動兵器』 『ISに敵うのはISのみ』 『ISの根幹たるISコアの取り扱いには日本政府に一任する』といったものだった。世界はISの登場に熱狂し、ISの技術を得ることに熱中した。

そして篠ノ乃束博士によってISコアの取り扱いを一任された日本に全世界が情報の開示とISコアの提供を迫り、日本は屈した。

そうしてISコアを手に入れた世界は、ますますISに熱狂し人類の新時代の到来を期待した。それが唯の夢想だと知りもしないで…。

「…くん。織斑一夏くんっ。」

「は、はいっ！！」

いきなりの大声で驚いてしまった。

このねつとりとした視線の数々と緊張感のなか大声を出せるとは、彼は大物なのかもしれない。いや、きっと大物だろう。

なにせ彼は世界で初めてISを起動させた男なのだから。

そう、『男』。ISにはとんでもない欠陥があり、それが男性にはISを動かすことが出来ないということだった。

それが生みの親の篠ノ乃東博士の意図したことなのかどうかは、日本政府にISコアを渡した後に失踪してしまった博士以外には誰にも分らなかった。

だがISの研究が始まって10年。どんな研究がされたかは知らないが様々な、非人道的な研究さえされているだろうに、誰ひとり『男』がISを動かすなどということは無かった。

しかし、『男』がISを動かせなくとも『女』には動かせるのだ。世界はそんな欠陥など知らぬとばかりにIS研究を進めて行った。

その一環でIS保有国はIS操縦者を保護する政策を次々に施行し、それは将来のIS操縦者になるかも知れない子供にまで及んで行った。

それは一応男女平等を謳っていた世界がIS操縦者優位へ、そこから段々と女性優位な世界へと変貌していく歴史の転換期だったのだろう。

そう、織斑<sup>彼</sup>一夏というイレギュラーが現れるまで、だ。

世界は再び熱狂した。織斑一夏というイレギュラーが現れたのならば他の『男』のイレギュラーがいるのかもしれない。そうなれば女性優位の世界からせめてIS操縦者優位の世界へ戻せるかもしれない。

い。そして今も尚解析できないISコアの解析の足掛かりになるのかもしれない。そんな期待をもって世界は次なるイレギュラー探しに熱中した。

そんな世界を変えてしまおう存在なのだ、彼は。

「ごめんね？自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

「いや、あの、自己紹介ぐらいしますから、落ち着いてください」

「本当ですね？約束ですからね？絶対ですよ！」

「はい、じゃあ……えー…えっと、織斑一夏です。よろしく願います」

「……」

彼は何を言ってくれるのだろうか？大物らしい発言をするのだろうか？

ちらちらと視線を彷徨わせているが、きつと言いたいことを頭の中で整理しているのだろう。

「……」

息を吸って、吐いたのが私の位置からでも確認出来た。言うべき言葉を決めたのだろう。

「以上です！」

「……」

がたたたつ、と身を乗り出していた女子数名が音を立てたが私も気持は一緒だ。

そう…だな。織斑一夏とはこういう男だったな。気を張っていた私がかバカみたいだ。

そうして、一瞬気を抜いたのが悪かったのか相手が気配を消すのが上手かったのか知らないが、いつの間にか新たな女性が現れていた。パアアンっ！と織斑一夏の頭で音を鳴らしながら登場したのは、すらりとした長身、スーツの上からでも分かる均整のとれた身体、野生の狼のような鋭い眼をした女性だった。

「いつ…、げえつ。関羽!？」

「誰が三国志の英雄か、バカ者」

まるで精悍な狼の群れに君臨する女王のような、そんな風格を漂わせた女性は、織斑一夏に注意を与えたと思ったら、その彼とコントを始めた。

いや、織斑一夏が一人でやっているだけなのだが……。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

成る程。彼女はわがクラスの担任様で

「キヤー。千冬様、本物の千冬様よ!」「ずっとファンでした」「

私、御姉様の為なら死ねます!」

クラスの人達の憧れの人ということか。そして

「で? 挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パアンっ!

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

織斑一夏の姉か。確かに昔見た時の雰囲気がある。

だけど昔より多少硬い感じがするな。以前見た時は今ほど硬くは無かったが尖っていた印象だったのだが…… 仕事中だからか?

「そうだ、他の者も気になってしょうがないみたいだし、この雰囲気をついでだ。李、お前も挨拶をしておけ」

「えっ? あっはい。えー、初めまして。中国出身の李明リメイです。一応『世界で二番目にISを動かした男』になります。ISについては素人もいいところですので、先生方を始め皆さんにはご迷惑をお掛けするかと思いますがよろしくお願ひします」

「えっ、二人目なんて報道されてなかったはずだけど……」「やっ

ぱり、男もIS使えるようになったのかな?」「えー、それはないんじゃない?」

「顔は…まあ普通ね」「そう?あの鋭い目つきとか……」

やはり、騒がれるものなのだ。それに、本人の前で批評されると…ここは笑うしかないだろう。

「あー、私が報道されなかった理由は中国政府が色々やったみたいで…一応、織斑一夏君のIS適性発見から2週間後に私のIS適性が発見されて、今頃私のことも報道されているんじゃないかと」と私の自己紹介中にチャイムが鳴ってしまった。

「と、そこまでだ。SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませる。いいか。いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

「「はい!」「」

「あー……」

1時間目のIS基礎理論が終わった休み時間。

隣の席の織斑一夏が机に突っ伏して唸っている。恐らく私と同じ心境なのだろう。

廊下にまでびっしりと並んで私たちを見学している生徒たち。何かの見世物にでもなったと錯覚しそうになるこの視線にはうんざりする。

その視線はクラスメイトも同じよう誰ひとり私たちに話しかけようとしない。正確に言えば、話したくても何を話せばいいか判らない、か。

それは、私も恐らく隣の織斑一夏も同じだ。

どうして私はここに来てしまったのだろうか。あのまま世界に公表されずに国内の研究所に引き籠もる選択肢もあったのに私は。

「えっと、お互い慣れない環境だろうけど頑張ろうぜ。えっと李？李明？」

「あ？ああ。私のことは李<sup>リ</sup>でいいよ。君のことは国の報道で知ってるよ。織斑一夏君」

「ああ、俺のことは一夏でいいぜ。フルネームで呼ばれると変な感じがするしさ。にしてもそっちでもテレビに出てるのか、俺」

「了解、一夏。それと一夏のこととは世界中に流れてると思うよ？なんていっても『世界初の男のIS操縦者』なんだから。私はせめて自分のいない所で報道してくれて、わがままをいって今日の報道にしてもらったのだけだね」

「俺もそうしてもらえば良かったかも。毎日テレビの取材だとか、どこかの研究所だとかが来て大変だったんだよ」

「私の方は殆ど研究所で缶詰だったから、その辺はお互い様だと思うのだけど」

「隣の芝生は青いつてやつなのかな、そういえば李<sup>リ</sup>って昔俺と  
「ちよつといいか？」

その瞬間、心臓がドクンツ！と脈打ったのが判った。今まで考えない様にしていたものが一気に血流と一緒に脳に溢れだした。

昔の、世界が輝いて見えていた頃の、胸の痛みと共にある喜びの記憶、私の罪と後悔と歓喜の記憶。そして、その後の色を失った世界での私の懺悔と悔恨の記憶。

もしかして いや、それは無いはず でも、彼女だったら  
「……………」

そう、篠ノ乃箒。一目見て分かった。

今では私より少し小さく見えるが、しっかりと立つその姿勢の良さ  
と日の光に照らされてきらきらと輝いている彼女の黒髪とつり目が  
ちの瞳が相まって、どこか凜とした抜き身の刃を未だに私に連想させる。

その刃は空っぽの世界で生きていた幼い私に、純粹に美しいと思わせた。

それは今でも変わらずにそう見える。

6、いや7年ぶりか？

幼いころの記憶よりも随分と綺麗になった。それに相変わらず髪型はポニーテールで良く似合っている。

彼女はきつと覚えていないだろう。いや、覚えていない方がいい。

だが、私は忘れなかった、否、忘れられなかった。

その彼女が此処にいて、私たちに声を掛ける？

やはり、覚えているのか？気づいてくれたのか？

「……………」

頼む、何か言ってくれ。耐えられない。何処かに走り出したくなる。落ち着かない。

「すまん、織斑を借りて行く。廊下でいいか？」

前半は私に、後半は一夏にだろう。

「ああ、大丈夫だ。一夏の知り合いか？積もる話もありそうだし、次の授業に遅れないようにな」

「お、おう。じゃあ李、また話そうぜ」

「早くしろ」

一夏に用事……………か。

そうだよな、篠ノ乃さんは昔から織斑のことが。

やめよう。こんなことを考えてもどうしようもない。だけど、篠ノ乃箒と織斑一夏か。ここでその二人に合うとは…いや、二人の特殊性を考えればこれは必然だったのか。

むしろ私の方が……………異物、か。

一人はISの生みの親の妹、もう一人はかのブリュンヒルデの弟。

そして篠ノ乃博士と織斑千冬は親交があったと聞く。

そして、現在のISコア研究者の一部は篠ノ乃博士がISコアを自

由に操れるのではないか、『男』にISを起動させることも彼女ならば可能ではないかと噂している。

ならば、博士と親交のあった織斑千冬の弟（それも博士と織斑一夏自体もかなり親しい）にISを使わせようと細工をしても不思議ではないとの噂も出てくるのは時間の問題だった。

篠ノ乃博士の社会性皆無な人間性はそれなりに流布しているので、この噂はそれなりの信憑性をもって語られている。

それによって、天然の『男性初のIS操縦者』は李明なのではないかという私個人にとっては非常に傍迷惑な状況なのだ。

だが、中国政府と日本政府だけは知っているはずなのだ。私が以前。

いや、あれは関係ないはずだ。そもそもあんなことで

だめだ、結局どうしようもないことを考えている。

こういう時は誰かと喋っていた方が気が紛れる。適当に誰か捕まえて喋らせてもらおう。

「ちよつとよろしくて？」

彼女の声が、話が聴こえた瞬間、私はちよつどいいとばかりに振り向いた。

「えつと、確かセシリア・オルコットさん…でしたよね？イギリス代表候補生で…そうそう、入試主席だとも。オルコットさんの自己紹介は良く覚えてるよ。欧州人の自己紹介は判りやすくいいね」

「あら？私のことを知ってらっしゃるなんて、なかなか出来た方の方ようですね。そう、私が入試主席のセシリア・オルコットですわ」  
「それで、そのオルコットさんは見世物状態の私を助けに来てくれたのかな？だとしたらありがたいんだけど」

「いえ、純粹に挨拶をと思ひまして。それにあなたのようなISについて素人の方は大変だろうと、何か解らないことがあれば教えてさしあげようかと思ひまして。私、入試で唯一教官を倒したエリー

トですから」

「それはすごい。私は起動出来ただけで合格だと言われたからね。それと、教師役の件は是非お願いしたいな。国の代表候補生に教えてもらったんだけど、その教官役の人は天才肌の人らしくて分かり辛い部分もあつたんだ」

「ええ、よろしくてよ。まあ、私もそれなりに忙しい身ですから暇な時にでも教えてあげますわ。下々の庶民にも施しを与えるのも貴族の務めですから」

「庶民とは、またひどい」

彼女のものに言い苦笑してしまう。彼女は代表候補生、一部のISに触れもしない女性が謳う、ISを前提とした女尊男卑とは違う。彼女自身の努力に裏打ちされた自負がそうさせるのだろう。

「けど、オルコットさんに教えられるのなら相応に頑張らなきゃね。ISに乗れるだけの男つてだけじゃ、オルコットさんに教えてもらう価値も無いだろうし」

「ええ、そのとおりですわ。エリートの私に教えてもらおうというのは、それ相応の気概を見せてもらいたいものですわ。それでは他の方への挨拶がありますので失礼しますわ」

「ああ、色々ありがとう。オルコットさん」

そう言つてオルコットさんは去つて行つたが……。

オルコットさんには『頑張る』と言つたものの、どうしようか？

この学園に来たのだからって自身の中に理由があつたわけでもないし、周りに流されるように来ただけだ。

だからこの学園を卒業した後はそのまま何処かの研究所で過ごす生を漠然と思ひ描いていた。ここでいくら『頑張ろう』とも未来は変わらない。だったら別に『頑張る』ことはなくてもいいんじゃないか？

まあ、いいか。適当にやろう。差し当たっては。

「ちよつといいかな？」

「へっ！？私？何？何か用かな？」

「いや、ちよつと落ち着いて」

隣で私とオルコットさんの話を聞いていたであろう生徒に話をしようと思つたのだが、慌てさせてしまったらしい。

「う、うん。それで、どうかしたの？李：明君？」

「一夏にも言ったけど、李でお願い、上田さん。それで、一応さっきの授業も何とかついていける程度だったんだけど、他の人はどうなんだろうと思つてさ。実際ISの勉強も一カ月もしてなかったしね」

「あー、李君とか織斑君はそうだろうね。私は一般で入ったからISの操縦関係はまだただけで、さっきの授業ぐらいなら復習つてところかな。でも私が習つたものより詳しくかつたけどね」

「もしかして、それつて此処にいる皆そうなの？」

「そうだと思うよ？ただ、IS学園に併設されてるIS研究所で新しく発見されたこととかも授業内容に反映されるらしいから知っている内容でも気が抜けないんだけどね」

「そうなんだ。ならせめて、皆に追いつかなきゃオルコットさんに教えてもらうことも出来ないね」

「確かに。でも、IS学園に入れただけでもよかつたじゃない。将来安泰だよ？それに私の友達は凄い頑張つてたのに落ちちやつて結局違う学校に入ったし」

「そうだね。私も折角この学園に来たんだ、その人の分まで頑張るよ。教えてくれてありがとう」

「うん、私にも解らないところとかあつたら聞いてね」

「ありがとう」

どうやら、私はこの学園でも底辺に位置する劣等生のようだ。それに関しては別に何とも思わない。彼女たちのように以前から努力した人と一カ月程度しか努力していない自身が同じだとは思つていなかったから。

だから、次の授業の開始を知らせるチャイムと共に一夏と篠ノ乃さんが戻ってくるのを目にしながら、私は精々やるべきことが増えた

としか思わなかった。  
そう、努力したものと努力していないものは違うのだから。

重い。

研究者達のISコア解明への期待が、他の男性のIS操縦者になれるかもという期待が、周りの生徒の『男』がどれくらい出来るのかという値踏みの視線が、私がこの学園に来たせいでISへの望みを断たれたかもしれない見知らぬ誰かの人生が、ただひたすらに重かった。

私はそんな期待を背負うことが出来る人間じゃない。

ISを動かしただけの！周りに言われるがまま此処に！この学園に来ただけの、『男』というだけの価値しかないこの私に！過去に向き合うことも出来ず、現在を見据えることも出来ず、未来を夢見ることもし出来ない、そんな人間に期待しないでくれ！！背負わせないでくれ！！

二時間目の授業が終わり、私は叫び出したくなった。

此処じゃない何処かにいって、私を知る人がいない所に行って叫びたくなった。

何を叫びたいのかも解らないけど、そんな気分になった。

私は此処で何をするのだろう。何が出来るのだろう。ただISが動かせるだけの価値しか私にはないのに。

誰もいないであろうトイレに向かいながら思う。廊下にいる生徒たちの挨拶やら自己紹介をいなし掻き分けて想う。

先の授業時に一夏は参考書を『電話帳と間違えて捨てました』と言った。

信じられなかった。信じたくなかった。彼は何も思わないのだろうか。それとも知らないだけなのか。私たちの立場を、望んでも得られないその価値を、希少さを、期待を。

そしてその後の織斑先生の言葉。

『自分は望んで此処にいるわけではないとでも言いたそうだな』  
『人間社会で生きること放棄するのなら、まずは人であることをやめるのだな』

その言葉は私自身にも突き刺さった。突き刺さり、私の心を切り裂き、血を吹きださせ、粉々に砕いた。

私は何なのだろう。私は人なのか？それともISを動かす世界に二つしかないパーツなのか？

彼は、一夏はどう思っているのだろうか。私は、私たちは人なのか、パーツなのか。

人であるなら他人の期待を、努力を、人生を背負わなければならない、背負って歩み続けなければならない。パーツならば何も背負わず、何も考えず、何も想わず、言われるがまま、命令されていればいい。

私には解らない。答えが出せない。どちらが正解なのか判断出来ない。

それとも彼は、一夏はそんなことは関係ない、俺は俺だともいうのだろうか？

男子トイレの中で、私は答えの出ない問いをグルグルと考えている。綺麗な場所だ。トイレの中だというのに汚れ一つ落ちていない場所。壁や床は磨きあげられ清潔感を演出し、設備は最新式で、常に空調が効いて匂いもしない。

その綺麗な場所で私は鏡越しに私を見つめていると、するりと問いが出た。

「君は何？」

鏡の中の私は笑っていた。その顔がひどく醜く見えて、この綺麗な場所に似合わなくて、私らしいと想った。

## 第二話

「全く、男子が二人いるというだけで……」

三時間目の授業の時間に遅れそうなために先に山田君を向かわせた為、一人で教室に向かいつつため息が漏れる。

一夏の方は今になって政府が寮に入れると言うし、李の方は今日になつての男性発覚だ。

元々中国政府からは二人入学すると推薦の連絡があつたため、寮の部屋割は組んであつたのだがそれもペアとなつた。

一人は男性というイレギュラーで、もう一人はいつ来るか判らないためだ。

全く連絡ぐらいしつかりしろと怒鳴り倒したくなる。

さて、チャイムが鳴る頃に教室にはつきそうだが。

「李、何をしている。もう次の授業が始まる。さつさと教室に戻れ」

「はい。いえ、トイレに向かった時に他の生徒に……」

「ああ、なるほど。今日は見逃してやるから次からは気をつける」

「はい、ありがとうございます」

李明、か。一夏に続いて『発見』された二人目のイレギュラーで、『天然』のイレギュラーとも言われる生徒。

とはいっても、私からすれば一夏も李も他の生徒も皆等しくガキだ。そこに差別も区別もない。思うところはあがあるがな。

それにあのクソ研究者どもめつ！全く、人の弟を捕まえて『養殖』という研究者どもには思わず握りこぶしを作ってしまった。

一夏はお前からすれば格好の研究材料なんだろうが、その前に私の弟だということを出させなければならん。

ああ、いや。今は仕事だ。それに生徒に関係ないことで荒れているところを見せるわけにもいかん。

「それと、李。眉間にしわが寄っているが、何かあつたか？お前もこんな環境に突然放り込まれたんだ。馴染めないのは判るがな」

「いえ、そういうわけでは。それに眉間にしわが寄っているのは元々です、織斑先生」

「ふむ」

そう言われて改めて李を見てみる。

細身だが体幹がしっかりしているところをみるに、身体は鍛えているのだろう。中国出身だというが、顔は大陸系というより日本人に近い容貌。目付きは鋭いというより細目というところ。

顔の造形自体は整っているのだろうが、雰囲気はどこか薄い。なんというか覇気がない。まるで風景に溶け込もうとしているかのような印象。

ほぼ初対面だからか、これ以上は判らん。

「まあいいさ。慣れない環境ということもあるだろうしな。それと一つだけ言っておくが……ヒヨコにすらなれてない卵共の悩みを聞くのも私の仕事のうちだ。何かあったら遠慮なく言え」

「っ！……ありがとうございます。その時は是非」

これに反応するか。やはり何かあるのか。まあ自分で言いに来るまで悩むのもいいだろう。それもガキの特権だ。

「では教室へ急ぐぞ。それと私より遅れて入るうものなら二度と遅刻出来んようにするぞ」

「えっ？そこは一緒に行く場面じゃ……」

「くくくつ。何を言ってる。私は教師だぞ？遅刻を許すわけにもいかんだろう。ほら、急げ」

「分かりました、先に失礼します！」

「廊下は走るなよ」

……。

李の後を追いながら、あれで多少は気が紛れればいいと思う。

今年は弟の一夏に李明というイレギュラーが現れたが、今年の生徒共はどんな成長をするのだろうか。それが私の楽しみでもある。

「さて、私も仕事をしなければな」

チャイムの音を聞きながら教室へ入る。

「逃げないことね！よくって!？」

「あ、ああわかった」

……これで厄介事が無ければいい職場なのだな。はあ。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性を説明する」  
この授業は私が担当するのだが、山田君も聴講するつもりらしい。  
メモまで準備して熱心なことだ。

「ああ、その前に再来週行なわれるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければならぬな」

つと、忘れるところだった。仕事に追われてミスをするとは情けない。しつかりしなければ。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

とたんにざわつき始める生徒達。

「はいっ。織斑君を推薦します!」「私もそれが良いと思います!」  
ほう、織斑か。どうせ、物珍しいからという理由だろうが推薦は推薦だ。それに私が言った通り大した差は無いのだから誰でも同じだにしても、あの馬鹿。あの何も考えずにいる顔はこのクラスにもう一人織斑がいるなどと抜けたことを考えているのだろう。先が思いやられる姿だ。

「あつ、じゃあ私は李君を推薦します!」「私も、私も」

まあ、この雰囲気なら当然だろう。

「では候補者は織斑一夏と李明と……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「つて、俺か!？」

さっきからそう言われてるだろうが、バカ者。それと立ち上がるな、

目の前に立たれると邪魔だ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないのなら」

どうするか。織斑と李は他の生徒と比べ、明らかに素人だ。模擬戦をさせるわけにもいかんし、何か適当な選出方法は……。

「ん？なんだ、李。推薦か？」

「そうだよ、李からも何か言っただろうぜ俺らじゃ、クラス代表なんて」

「煩い。黙れ」

パン。

「痛っつ！」

ふんっ。私の指示に従わないからだ。

「李、言え」

「はい、私はオルコットさんを推薦します。入試主席だと聞きましてので適任かと思っただのですが」

ふむ、オルコットか。入試主席で、試験とはいえ教員を倒す實力もある。他の生徒よりも頭一つ抜けているのは事実だが、それだけで決めるのもな。

「その通りですわ！大体、李さんとはかくその無知な男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにその様な男の下という屈辱を一年間味わえと仰るのですか！？」

はあ、先の厄介事が早速か。自分が原因なら自分で処理しろよ。弟よ。

「実力からすれば私がクラス代表になるのが必然。よしんば、他の要素があったとしてもあのような物を知らない極東の猿にわたくしが負ける謂われはありませんわ。わたくしはこの学園に修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」「あー、山田君。そんなに慌てなくてもそのうち落ち着くところに落ち着くさ。だから私は知らん。」

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしであるのは主席ということからも明白ですわ！！」

「大体、あなたのような男が、織斑先生の弟というだけで」

「千冬姉は関係ないだろ！！大体、そういうお前だって、人のことをぐちぐち言える人間なのかよ！」

「なっ……！？」

織斑よ。口から出たものは戻せんぞ。まずいと思っているのならいいが。オルコットも言いすぎだとは思うがな。

李も自分の発言からこんな展開になって驚いて……いない？何か思いつめているようだが……。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしを侮辱しますの！？いいですわ、決闘ですわ！！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますが」

教室の雰囲気はオルコットと織斑を中心として、他の者は見物している状態だ。

だがその中で李だけは先ほどから沈黙したままだ。

何を考えているか知らないが、今回のことを利用するか。李も少しは気分転換になるだろう。

「男が一度言ったことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー？それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

つと、今は李のことだけ考えている訳にもいかないな。

「織斑とオルコットは話がまとまったようだが……李、お前は どうする？」

そこでようやく織斑とオルコットは李のことを思い出したのか、ハッとしていたが。

「そう、ですね。辞退は？」

「他薦されたものに拒否権など無い、選ばれた以上覚悟しろ」

「なら、最初に私と一夏を戦わせてもらっていいですか？その勝者

がオルコットさんに挑戦という形で」

「ふむ、理由は聞かないがいいのだな？ ハンデは？」

「いいません」

「ならば勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。

李と織斑が初戦で、勝者がオルコットと対戦だ。各自用意をしておくように。それでは授業を始める」

パンツと手を叩いて空気を入れ替える。

これedyouやく授業を始められると安堵しながら私は授業を進めはじめた。

放課後、私は早速学園の訓練機を借りるために受付に向かった。

「すみません。この書類を見せれば訓練機が借りられると聞いたのですが合っていますか？」

「うん？ ああ、君が噂の男性IS操縦者か。『二人目』の方かい？」

「ええ、まあ」

「それなら、中国政府から話しは通っているよ。機体はどれにする？」

機体か。この選択で私の戦術も決まるから考えなくては。候補としては二つ。

まずは日本産の訓練機『打鉄』、安定した性能で、特に防御面に信頼性がある。近距離志向の機体。

次はフランス産の訓練機『ラファール・リヴァイヴ』、性能自体は打鉄よりも高いレベルでまとまっているが、汎用性重視のために器用貧乏に陥りやすい。全距離対応型の機体。

一週間後の模擬選では殆ど技術の向上などは期待出来ないだろうから、触れたことすらない銃器を軸にするのは無謀。それにどれだけ相手の攻撃を避けようと私の技量では被弾率が高い。

ならばダメージ覚悟で相手に近付いてのダメージを与える短期決戦

を望むのが精一杯か。

となると打鉄を選ぶのがいいか。

「では打鉄をお願いします」

「了解。あと、その機体は君の専用機が来るまで独占だから整備室に持って行くのもお願いね。あとその書類を持っていけばアーリーナの使用も優先されるらしいから」

「わかりました。ありがとうございます」

「あと、稼働データが欲しいからって、隣のIS研究所の黄さんの所に呼び出しがあったら行くように」

「了解です」

この書類にそんな意味があったとは。政府もどれだけ日本と学園に金を出したのか、私にそこまでISを使わせようとするとは恐れ入る。

だが、今となってはちょうどいい。

自分で言って、決まったことだ。せめて無様を見せない程度には『頑張ろう』。

「はあっはあっはあっ」

きつい。ISに乗るのがこんなにもきついとは思わなかった。

訓練機を受け取った後、比較的小型のアーリーナを借りて山田先生に教わりながら、ISを乗り回していたのだが二時間もしないうちに限界が来てしまった。

ISは脳とISコアを繋げて人間の脳だけでは判断しきれない高速の世界で思考を可能とさせる。

だが、思考自体は高速でも、そこからどう動くかは自分で判断して動かさなければならぬ。

そこで普段身に付いている無意識の動きがIS特有の動きを阻害させ、イメージ通りの動きが出来ないどころか危うく墜落するという

場面もあつた。

それに無理な機動をすればISの生態補助機能が限界を迎え、怪我をする恐れもある。

いくらISお得意のシールドバリアや絶対防御があるとしても墜落の恐怖や自分が宙に浮いているのには慣れない。

こんな有様で来週の模擬戦で戦えるのだろうか？

「あつ、李君。先ほど織斑先生がいらつしやって言伝を預かりましたよ」

「はあ、迷惑をかけてしまったようで」

「いえつ、迷惑だなんてそんな」

「それで、私にどういった用件で？」

「そうでした。李君の寮の部屋が決まったので、それをお知らせに」  
「なるほど、態々ありがとうございます、それで部屋はどちらに？」

「一夏と同じ部屋ですか？」

「部屋の番号は1037号室になります、李君は一人部屋ですね。  
荷物は既に部屋に入れてありますので」

「個室ですか？よく準備できましたね」

「ええ……日本政府は急に織斑君を入寮させるし、中国政府はぎりぎりまで李君の性別を隠すし……大変でした」

「それは……申し訳ありません」

「いえつ！李君が悪いわけじゃないですから。それと、大浴場は使えないので、部屋の備え付けのシャワーで我慢してください」

「わかりました」

「あと、そろそろ夕食の時間なので、今日はもう終わりにしましょう。遅れない様にしてくださいね」

「はい。それと質問なんですが、大丈夫ですか？」

「勿論大丈夫ですよ！それでどうしたんですか？」

「ISに乗っているとどうも違和感というか、普段と違うので戸惑ってしまって。何かコツみたいなものではありませんか？」

「うーん、そういうのはコツとかないんですね。とにかく乗って

慣れるしかないと思います。特に訓練機などの量産型は操縦者がISに合わせなきゃいけないので……力になれなくてすみません」

「いえ、参考になりました。ありがとうございます」

「いえ、そう言ってくれると先生も嬉しいです」

「あつ、あと学園にあるIS戦の映像記録の貸し出しの許可をお願いしてもいいですか？」

「それぐらいでしたらお安いご用です。明日には許可が出ると思いますが放課後には借りられると思いますよ」

「ありがとうございます、山田先生。お世話をお掛けします」

「生徒の為に働くのが先生の務めですから。それでは、夕食に遅れないようにしてくださいね」

ふうっ。とりあえずはISを動かすことと授業についていくことしか出来ることは無いな。

一夏は今頃何をしているのだろうか。私のようにISに乗っているのだろうか。

ふと、アリーナの遮断シール越しに空を見上げた。

黒く染まり始めたソラに一番星と月が見えた。

美しく輝く円い月に、まるで寄り添うように一番星が輝いていた。

きつと篠ノ乃さんは彼の傍にいるのだろうか。一夏との関係が昔と変わらないのなら、きつと。

昔からそうだった。彼女と彼は二人で完結していて、私はそれを見ているだけだった。

彼に恋した人は星の数いれど、彼女ほど彼に近付いていた人はいなかった。

彼はあの月の光のように優しさを振りまいて、周りの人を虜にしていく。その月を独占しようと、近づこうとする人はいつしか手が届かないことを知って諦めて云った。

それでも彼女は手を伸ばしていたんだ。いつか月の、一夏の手が彼

女の手を掴んでくれるのを夢見て。  
そうして、あの一番星のように宙へと上って行った。私の手の届かないソラへと。  
まるで、月に魅せられて宙へ目指していった宇宙飛行士みたいに、皆が諦めたものを目指して上っていったんだ。

気づくと山田先生と別れてから一時間も灯りの付いていないアリーナに私はいた。

ISからは既に降りていて、ただ空を眺めていた。

「星がきれいだ」

満点の星に囲まれた円い月は今日も優しく私を照らしていた。

私は月に背を向けてISを片づけ、部屋に向かった。

誰もいない、ポストンバツク一つが置いてある部屋へ。

「夕食はもうないだろうな」

「悪かった、ホントにすまんっ！」

朝、空きっ腹を抱えて食堂に向かい、助かったとでも言いたげな表情の一夏に誘われるがまま同じテーブルに座るといきなり謝られた。

「いや、何を謝られてるのか判らないけど、頭を下げるのはやめてほしいんだけど」

何これ？なんでいきなりこんな羞恥プレイなの？趣味なの？一夏の趣味なの？

「いや…昨日のセシリアとの喧嘩に李も巻き込まってしまったからさ」  
なんだ。趣味だったわけではないのね。安心したよ。

「いや、私の方こそオルコットさんを推薦したばかりに…昨日話した感じだとあんなに攻撃的な人じゃなかったはずなんだけど……」

「それは…なんというか…俺が悪い…のか？どうなんだ？箒…篠ノ

乃さん……」

「……」

「なあ、いい加減機嫌を直してくれよ」

ん？喧嘩でもしたのか？昨日はこんな感じじゃなかったはずだけど。篠ノ乃さんは普段の凜とした表情と違ってムツとした顔をして黙々と朝食を食べている。私たちの話に混ざることもしない。何かあったのか？

つと、その前に……。

「そういえば一夏と……篠ノ乃さんの関係は？昨日の感じだと知り合いないんでしょう？」

「ああ、そうなんだよ。箒とは幼馴染なんだ。家も近くて一緒の道場にも通ってたんだぜ」

「へー、通りで二人は親しいわけなんだ。これからは私ともよろしく、篠ノ乃さん」

知ってるよ。私はそれをずっと見ていたんだから。

そして、私が知っていることを態々聞かなければいけない現状への苛立ちと隠していることの罪悪感が弱冠沸いてくる。

にしても、幼馴染ね。あの頃と関係は変わっていないのか。

私は少し浮かれていた。

彼女と一緒にご飯を食べるという状況に。彼女と一緒に居れると言うこの幸運に。まだ彼らの関係が決定的でないことに。そして、彼女と真つ白な関係でまた始められることに。

「そうなんだよ。だから箒と同じへ」

「お、織斑君、李君。一緒にいいかなっ？」

「へ？」

「私は構わないよ」

「俺も別にいいぜ」

小さくガッツポーズをしながら、朝食のトレーを机に置いたのは私たちのクラスの三人だった。

「うわっ、二人とも朝からすっごい食べるんだね」「お、男の子だ

ねっ」

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「私は昨日の夕食を食べ損ねてね、今日は特別多いだけだよ」

一夏と三人の女子が楽しげに会話していく中、篠ノ乃さんは食べるペースを上げた。

「あの、篠ノ」

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん？ああ、また後でな」

彼女は私が話しかける前に去ってしまった。

彼女は私を覚えていない。

明<sup>あき</sup>。

そう呼ばれることはもう二度とないのだろう。

彼女の中に少しでも私がいたという証を残そうと、それが例え傷だろうとも構わないと必死にもがいた記憶。

それは全て無駄だったのだなと、私はひどく冷めた頭で考えていた。

胸の奥がチクリとしたのを私は気付かないで一夏達と話をする。

「そういえば織斑君って、篠ノ乃さんと仲いいの？」

「お、同じ部屋だっけ聞いたけど……」

「ああ、まあ、幼馴染だし」

「は？」「……えっ？」「……」

「えっ？いや、なんで李まで驚いてるの？さっきいったろ？」

「いつ、いや。何でもない。というか一夏は個室じゃないのか！？」

「李のほうこそ誰かと相部屋じゃないのかよ！？俺だけ？」

「何で李君は個室？」「やっぱり、織斑君と篠ノ乃さんって付き合ってるのよ」「あー私織斑君狙いだっただのに」

「いや、中国の代表候補生がこの学園に来る予定なんだけど、その連絡が未だに無いらしい。だから今日来るかもしれないし来週かもしれないって状況だから、一人分部屋を開けておかなきゃいけないって聞いている」

彼女と一夏が同室だと聞いて動揺してしまったが、私は上手く隠せただろうか？

それに、何故彼女と一夏は同室なのだ？谷本さんが言った通り、彼らは付き合っているのか？幼馴染では、昔と同じ関係だったのではないのか？

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

タイミング良く織斑先生の声が食堂に響き渡り、皆慌てて朝食の続きを食べ始めてしまった。

どうもこれ以上話せる雰囲気ではないので、私はモヤモヤした感情と疑問を朝食と一緒に飲み込んだ。

昼休み。

私は朝から続く憂鬱な気分のままだった。いや、さらにひどい。

先ほど一夏と篠ノ乃さんは手を繋いで一緒に昼ごはんを取りに行つたのを目撃したのが拍車をかけたのだ。

それを見た上田さん達は朝の話も知っているのだろう、喜々とした顔で話しかけてくる。

「ねえねえ、李君。やっぱり、あの二人付き合ってるよね！織斑君から何か聞いてない？」

「二人は幼馴染だとした私は聞いてないよ」

私にはそう答えるしかなかった。例え小さな希望でも残しておきたかったのだ。

「それはあれだよ。織斑君は噂されるのが嫌で隠しちゃって、ちゃ

んと言ってくれない彼氏に篠ノ乃さんは怒ってたんだよ！それで言葉で言えない織斑君は行動で示そうって！きゃー！そういう不器用な優しさっていいよね！二人で手繋いで一緒にご飯食べるんだよ！」

「私もそんな彼氏が欲しいな！」

「入学前から付き合ってたのかな？」

「やっぱりあの二人はそうなのかな？」

「絶対そうだよ！篠ノ乃さんもなんだかんだ言っても結局嫌がらずに着いていったし！」

やはりそうなのか。

私には夜空に浮かぶ月と星を見上げることしか出来ないのか。手を伸ばそうとも決して届かず、月を羨むことしか出来ないのか。

月面着陸時に月に降り立ったアームストロング船長を、月の周回軌道から眺めることしか出来なかったマイケル・コリンズのように。人類はニール・アームストロングこそが英雄だと持て囃した。

彼らに一体どれほどの差があったと言うのか。マイケル・コリンズは努力したはずだ。それこそアームストロング船長に負けないほどに。

なのに、一人は人類初の月面着陸成功の英雄で、一人は月の土さえ踏めずに英雄の陰に追いやられてしまった。

船長と彼は何が違った？

力も、知恵も、経験も、努力も、月への情熱も、何も違わないはずだ。

ただ船長という役職に選ばれたか選ばれなかったの違いしかなかったはずなのだ。

私と一夏は何が違う？

努力しなかった？頑張った、私は頑張ったさ！必死に彼女にアピールした。それでも駄目だった！

一緒の時間を過ごす長さ？私は彼女に話した！学校にいる間は出来

るだけ一緒に過ごした！それでも駄目だった！

力が無かった？彼らが剣術道場に通っていたように、私だって通っていたさ！一夏にだって負けない強さだった！それでも駄目だった！それでも彼女が好きになったのが一夏だった！彼女が見つめる先は何時だつて一夏だった！彼女が恋をしたのは一夏だった！選ばれたのは一夏だった！！

それでも好きだった。好きで好きで堪らなかつた！！だから一夏が気づく前に、彼女の想いが届く前に私に振り向かせようとした！！それでも駄目だった！！

一夏が優しくすると彼女は笑った。一夏が他の子を優先すると彼女は悲しんで嫉妬した。一夏を見つけると彼女は私を置いて走って彼に向かった。

ぜんぶっ！全部私には見せなかつた彼女だ！！

私はマイケル・コリンズと同じだ。

必死に努力し、情熱を燃やし、目指した物の近くに行っただけ。最初から眺めることしかできず、選ばれたものを羨むだけだ。

私の初恋は終わったのだな。いや、始まっていない。何故なら最初から終わっていたのだから。

だからだろう。涙も出てこないし悲しくも無い。ただ、胸にぽっかりと穴が空いたようにしか感じられないのだから。

その穴は最初から空いていて、私が今まで気づかない様に、気にしない様に、慎重に蓋をしてあつただけの穴だ。

それに今更気付いただけだ。

「李さん、ちよつとよろしくて？お話があるのですが」

そうやって、私が落ち込みかけた時に話しかけたのはオルコットさんだ。

この人はタイミングが良いのか悪いのか。

私が沈んだ気分の時にばかり話しかけてくれる。

「えっ？あ、ああ。ならお昼を食べながらでもいいかな？上田さん達と一緒に」

「いえ、それなりに真剣な話ですので……来週の模擬戦のことで」「あつ、それなら私たちのことは気にしないでいいから！」

食堂につき、一夏と篠ノ乃さんが見えない席に座ってオルコットさんと話す。

今は彼らの姿を見たくなかったから。

時間をおいて、それから事実を認めて、おめでとくと祝福したかった。

「それで、話って？」

「ええ、昨日のことを謝ろうかと思いましたが。決闘自体に後悔はありませんが、李さんを巻き込んだのはわたくしの落ち度でしたわ」

「一夏にも言われたけど私は気にしてないよ。むしろいい機会だとさえ思っているから」

「いい機会、ですか？」

「そう、昨日オルコットさんが一夏に言った言葉はそのまま私にも当てはまると思ったんだ。だから、かな。昨日オルコットさんに言った教師役をお願いしなくなった。入試主席で代表候補生で専用気持ちのセシリア・オルコットに、ISを教えてもらいたくなった。

私に教える価値があると思わせたくなった。そのための、機会」

「ふふふつ、恥ずかしいですわ。あんな無様な、頭に血が上っていた時のわたくしの言葉でそう言われてしまったら……本当はわたくし、訓練機で戦う李さんにハンデでも差し上げようかと思ったのですが、やめておきますわ。ですが、待っておりますわ。李さんがわたくしに教える価値があると示す時を。ですから、織斑一夏などわたくしの分まで叩きのめして、わたくしの前に現れてみなさい」

「オルコットさんに認められるように精々努力させてもらおうよ」

「では、来週お待ちしておりますわ」

そう、今は来週勝つ事だけを考えよう。それ以外を考える余裕なんて私には無いのだから。私の価値を、私だけの価値を見つけるため

にも。

勝たなければならない。

### 第三話

勝たなければならぬ！

そう意気込んでみたものの、急にISを乗りこなせるわけでもなく、私は放課後のアリーナで倒れていた。

山田先生はこれ以上肩入れさせるのもまずいと思い、遠慮してもらった。

ISに慣れるために我武者羅に動かした。他の生徒の知識量に追いつく為に授業や休み時間に関係なく分厚い教科書を読んだ。模擬戦の話聞いて声を掛けてくれた先輩達と一緒に、IS戦の記録映像を見て戦術を練った。

足りない。

食事の時間を削り、日課の早朝鍛錬を削り、睡眠時間も削った。

足りない！

織斑一夏に、セシリア・オルコットに、専用機持ちに勝つために。

タリナイ！！

他の生徒に出来ることが今の私には出来ない。

私の価値を見つけない。そう思ってもどう見つけなければいいのかわからない。

だけど、私はISに乗る以外に出来ることをもっていない。

だから勝ちたい、勝ちたい！！ 勝ちたい。何処か一つだけでも勝っていたい。

そうだ、私は。勝って私の価値を、私は人だと示したいんだ。

「時間か……」

打鉄を片づけて、先輩たちと戦術を練る。

その後自室に戻り、購買で買った夕食を食べながら参考書を読んで私にも出来そうなISの機動を探る。

私は未だに一夏と篠ノ乃さんのことを整理出来ないまま、祝福できないままだ。

今は模擬戦にだけ集中しろ。

「打鉄……整備もしなきゃ」

眠る前に思いだしたのは、放課後に一夏と嬉しそうに剣道をしていた篠ノ乃さんのことだった。

日曜日の午前。

私はIS学園の隣、IS研究所のコア研究解析班の黄さんの元を訪れていた。

IS研究所は開発はしないが、ISコアから機体に使われる素材まで、ISに関わるありとあらゆるものを研究・解析・実証するところだ。

その研究所に訪れたのは、模擬戦前に先日から乗り回していた打鉄のデータを取るために呼び出されたからだ。

私自身のデータは中国の研究所で散々取られたものが政府によって提供されているため必要無いそうだが、IS操縦時の話が聞きたいそうで私も来ることになった。

話は黄さんの研究室で聞くらしく、彼と共に向かっている。

案内された研究室は物が散乱していたりといったことは無く、むしろ無駄を省いた結果必要なものまで無くしてしまったと思わせるほど、物が無かった。

「やー、李君。今日は朝からすまないね。早速君が今まで使ってた訓練機のISコアのデータを取らせてもらうよ。多少時間がかかるからコーヒーでも飲みながらゆっくりしてて。にしても、入学一週間で結構IS動かしてみたんだね。専用機じゃないから形態変化

どころかIS自体の『成長』は望めないけど」

「はあ、一応基礎の基礎程度は授業で教えてもらいましたけど、『成長』？」

黄さんは説明をしながら仕事をするつもりなのか、何も無い空間からキーボードとディスプレイを取りだした。

この空間投影技術は今の世界ではこの研究所と学園でしか見られないものだろう。それは、この研究所がISを研究しているためだ。

「ああ、まだ習ってないのか。うーん、一次移行や二次移行は知ってる？あればざつくばらんに言っ飛ばせば人間で言う乳児とか幼児に値するんだ。ただ人間は日々成長して赤ちゃんから幼児に変わっていくから判り易いけど、ISは一次移行や二次移行の時にだけ一気に『変化』するんだ。それが今までのISの成長についての通説。今まではISが形態変化するまで目に見える形で成長しないと思われていたんだけど、最近の研究では一部のISの機能の一部分が形態変化もしないで成長しているのが判ったんだ。それもコアが司る機能、つまり俗に言うISコアの意識とも言える部分が微妙に変化していたんだ。それが『成長』。ただ、この現象もまだサンプル数が少なく推論止まりで、『成長』と『変化』は同じか違うかはハッキリしていない。それは『変化』するコアも『成長』するコアも、コア自体に違いが無いから。だけど『変化』と『成長』が違うならISは形態変化していかとも何らかの刺激によって『成長』するってこと。僕以外のコア解析班の連中なんかはサンプル探しで世界各国に出張だよ。全く、IS保有国も僕らの研究の成果を欲しがるなら、そういったサンプルを素直に渡してくれてもいいのに。どうせISコアは貸与されてるだけなんだし」

「うん？要はISは形態変化をしなくても一部が変化するのが『成長』ってことですよ？機体性能が変わると『変化』、機能が変わると『成長』」

「そうゆうことだね。ISが現れてから10年。未だに人類はISを10パーセントも理解出来てないんだよ。だから『成長』も『変

化も』実は同じでもので、発露の仕方が違うだけなのかもしれない。要するに結果は判ったけどそれ以外はさっぱりってこと。実際ISCコアには反重力発生やら慣性制御やら生体補助、果ては量子変換機能まで理解も納得も出来ない技術が目白押しだ。さらにはコア独自の単一仕様能力もだ。現在のISCはまさに家電と同じだよ。理論や原理が解らなくても使い方は解るから、便利だから使ってる。人類の科学の歴史は篠ノ乃博士どころかISCコアにすら敗北したんだ。僕らはISCが独自に発現する単一仕様能力や機体に使われている素材や技術を解析するの一手一杯。いいや、それさえ満足に出来てない。辛うじて解析された技術ですら、今までの技術の数世代先のものだ。実際、初期に解析されたものを実用化出来たのなんてここ34年じゃないかな？いいかい、李君。今の科学技術の最先端は、ほぼISC由来の物だ。だから、李君や織斑一夏君のようなコアに由来するようなイレギュラーは人類にとつて福音にも等しいんだ。君達のことを足掛かりにISCコア自体を解析出来れば、人類の科学は一足飛びに進歩する。ISCが登場した当時に言われていた人類の新時代が訪れるかもしれないんだ」

「新時代、ですか」

「そう、新時代だ。もしISC技術の全てを自由に使えるようになってたのなら、人類は宇宙にすら自由に進出することになるよ。領土や資源や環境、もしかしたら宗教の問題だって解決するかもしれない新時代だ。それが篠ノ乃博士とISCによつてもたらされたのは悔しいが、科学の、人類の発展に貢献できるのが君たちなんだよ」

「人類に……貢献ですか。私が、ISCに乗れることしか出来ない私がそのような……」

「何を言ってるんだい。それが凄いいんじゃないか。君は自信を持ってISCに乗ればいい。そうすることで、人類は発展していけるのだから。……つと、少々脱線してしまつたね。そろそろ本題の方に入るうか。どんな些細なことでも遠慮なく言つていいから」

その後は私のISC操縦時の話をずつとしていた。さつきまでとは違

う仕事を遂行する大人の顔で。  
その事に私はホツとした。

彼が未来を語る時、子供のような顔で私を見つめるのだ。きらきらと、子供が宝物を見つけたような瞳で。

私はその瞳に気圧されて、委縮してしまう。IS学園に入るまでに向けられたものと同じだったから。

彼らの眼に映るのは私ではなく人類の新時代。

彼らはきつと善良な人なんだと思う。純粹に科学の発展を願い、純粹に人類の発展を願っている。異論の余地も無く願っている。

本国では私の専用機の為に、大勢の人が日夜働いているそうだ。学園では私の為に時間を割いてくれる人がいる。私が舞台上上がるのを待っていてくれる人がいる。

彼らは「得られるもの」があると思っっているから、私の為に協力してくれる。

私は彼らに「渡せるもの」があるのか？

それが心苦しくて申し訳ない。

「　　と、今日は大体こんなところでいいかな。ISのデータ採取も終わっているだろうし。打鉄は整備室に送っておけばいいんだつたな？それじゃあ出口まで送るよ」

「はい……ありがとうございます」

三時間ずっと喋りっぱなしで、のどが痛い。

黄さんの会話は、IS操縦時にどんな感覚がするか？どういう風に動かすか？といった観念的な事が多く、私には上手く言葉に出来なくて答え辛い物ばかりだった。

そんな言葉足らずの私の発言でも、黄さんは相槌を打ち、しっかりと私を見て聞いてくれていた。

黄さんの真剣な瞳に、委縮していた私は励まされ、最初はぼつぼつと言葉を選びながら、段々と滑らかに、最後絵を描きながら流れる水のように話した。

「いやあ、それにしても。明日は織斑君と模擬戦だろ？助かったよ。僕たちもこんなに早く君たち二人のデータが入るとは思っていなかったし。君たち二人は経験を積める、僕たちはデータが取れる、いいこと尽くめだね！それじゃ、今度は来週来てね。模擬戦時の話が聞きたいから！それじゃ、頑張ってるね！」

「了解です」

「あれが『二人目』ですか。傍から見ると普通の学生ですね？黄さん」

「そうなんだよ。『一人目』もそうんだけど、どこからどう見ても普通の男。なのにISを使える異常。ホント、どうなってるんだろうね？」

「まあまあ、それを調べるのが私たちの仕事じゃないですか」

「でも、『一人目』の方は試験の際に起動させただけで、それ以降起動させてないけどいいのかい？」

「よくないですよ。良くないけど、そちらは姉の方がね……」

「ああ、例のブリュンヒルデか……確か……殴られたんだっけ？」

「いえ、肩をこう……ぐつと掴んできて笑顔で見つめられただけです。ちなみに指は骨の隙間に、掴んだ手はまるで万力でしたけどね」

「それは……ご愁傷様だな」

「少しはこちらの実験に協力してくればいいのに。そうすれば『養殖』なんて呼ばないのに」

「こんなに判り易い呼称も無いと思うんだけどねえ。」

「なら、いつそのこと呼称を変えて『ヘルマフロディトス』にしま

しょうか、ちょうど明日には神が手を加えたサルマキスが到着するらしいですし」

「ギリシャ神話かい？なら『天然』のほうは差し詰め『アンドロギユノス』かね」

「いいや、わかりませんよ。神に弄ばれる『テイレシアス』の方がもしれない」

「確かに。伝え聞く篠ノ乃博士ならやりかねないね」

「そうです。それにもし彼が『アンドロギユノス』なら、いずれ神の裁きを受けるでしょうしね」

「まっ、僕たちにしてみれば彼が『アンドロギユノス』でも『テイレシアス』でも神が出てきた時が絶好の機会だから関係ないけどね」

「めいめー、遅いー。」

「ごめん、研究所で話しこんじゃって……」

整備室に向かうと、既に布仏さんは待っていた。

彼女は私が打鉄の本格的な整備が出来なくて、どうしようかとマニュアルとにらめっこをしながら困っている時に手伝いを申し出てくれた。

姉が整備科で彼女自身も整備科志望の為に、勉強の為に一緒にやりたいと言ってくれたのだが。さすがに一年生二人では無理だと思いつ断ろうとしたのだが、彼女の姉も呼ぶという言葉と、何より彼女独特のペースに押し切られてしまった。

「仕方ないなー。あー、でも私もめいめーに謝らなきゃ。お姉ちゃん、急な用事が入ったから来れないって連絡が来て。でもー安心してー。強力な助っ人を呼んでるからー」

「助っ人？布仏さんのお姉さんの友達？」

「違うよー。でも、腕は確かだから期待していいよー」

布仏さんと話しながら整備の準備をするが、そろそろ整備に入るの

に助っ人とやらはまだ現れない。

「助っ人さんはまだ来ないのかな。そろそろ、整備を始めないと…」

…」

「うーん、そろそろ来ると思っただけどー。ちょっと連絡してくるねー」

「了解。それまでマニュアル見てるよ」

整備。

一言で言えば簡単だが、ISの整備は従来の機械を整備するより遥かに難しい。

従来の機械なら、同じ規格の部品を使い同じ設計図通りに組み立てれば、一定の水準の性能を発揮する。

しかし、ISは違う。

ISは細かな傷などは自己修復するが、部品の摩耗には対応していないために点検や交換を行うのだが、同じ規格の部品でも交換しただけで動かなくなることもあるほど、精緻なバランスで構成されている。

ISコアの『好み』とも称されるそれを、ある程度解決したのが量産型と呼ばれ、打鉄やラファール・リヴァイヴがそれらの代表である。

ただし、専用機などの完全にISの『好み』を満たした機体とはエネルギー効率や形態変化のし難さなどの問題提起が為され、未だ議論されているものもある。

そのために例え量産型の機体でも、ISにより『好まれる』部品を選ぶことが求められる。

よって、普段の簡易整備の際は機体の異常を、本格的な整備の際はISの『好み』やそれらの組み合わせを見ることが目的である。

俗に、操縦時とは違うバイパスでISコアと脳を繋げ、ISの『好み』をIS自身に尋ねるように把握する手法を『通訳』といい、そ

れらを行なう人を『通訳士』と呼ぶことがある。  
類義語で『翻訳士』があり、こちらはIS技術を解析する際に活躍する。

「うーん。簡易整備ならマニュアルと機械任せで出来るんだけど……  
ISの『好み』とか言われても私にはさっぱりだ」

「それはねー、『通訳士』の適性がないとダメだからねー。それと、  
助っ人きたよー」

「あれ？布仏さん？いつ戻ってきたの？」

「さっきだよ？めいめーがマニュアルに集中してたからー、気づかなかつたんだねー」

「それで、そっちの人が……」

「かんちゃんだよー、かんちゃんは『通訳士』の経験もあるからばつちりブイだー」

「えとっ……更識簪……です」

「李明です。今日はよろしくお願いします」

更識さんは小さく名乗ると眼鏡を押し上げ視線を彷徨させた。

「えとっ……『通訳士』の経験つて……いつても……殆ど見てただけだから。……それと、本音。整備をやるなら……やるってちゃんと言って」

「えー、かんちゃん学園に入ったら弄つてみたいって言ってたから誘ったのにー」

「えと、私が布仏さんをお願いしたのが原因だから……ごめん」  
どうやら二人の間で上手く意思の疎通が取れていなかったらしく、  
雰囲気が悪くなる前に私は頭を下げる。

「……機体は？」

「え？あつ、この打鉄です。すぐに整備に入れるけど……」

「整備は……時間が……かかるから、すぐにやる」

「えへへー。ありがとっ。かんちゃん！」

どうやら手伝わってくれるらしい。良かった。

そう思っていたら、最初だけだった。彼女は整備を始めると『通訳』をし始め、怒涛の活躍をみせた。

「……これじゃダメ。……87番を……」

「この部品……もう使えない……廃棄」

「これは……まだ使えるけど……258番に交換」

「さっきの……交換した部品を……考えると……こっちの構成が……でもこの部品は……」

「この部品を使えば……反応速度が……でもこっちなら……出力が……」

布仏さんも一年生とは思えない知識で更識さんをサポートしていたが、それでも更識さんは圧倒的だった。

私は二人の邪魔をしない様に荷物運びをしていただけで、殆どを二人に任せている状態で、そのまま整備を終わらせてしまった。

「ふう。二人ともお疲れ様。そしてありがとう。ちゃんと整備が終わったのも二人のお蔭です」

「私は……別に……機体を弄れただけで……好きなことをしてただけ……だから」

「かんちゃんがー、照れてるー」

「本音……嫌い……」

「ふふっ。二人は仲が良いんだね？」

「もちろんだよー。だって幼馴染だしー、なんといつても私はかんちゃんの専属メイドさんですからー」

「メイド？」

「……家が……そうだっただけ」

そう小さく言った更識さんの顔は、さっきまでの楽しそうな顔でなく複雑そうな顔をしていた。

その顔を見た布仏さんはいつものものにへらっつとした顔を困った顔に変えていた。

「あっそういえばー、めいめーってたまに顔を手で覆う仕草をして

るけど何でー？」

布仏さんが雰囲気が暗くなる前に話題を変えてくれた。

「あー、それは昔からの癖で……小さい頃はその癖があったから伊達眼鏡をかけてたし、つい手が行っちゃうんだよ」

「伊達眼鏡？なら、かんちゃんも伊達っちゃ伊達だねー」

「そうなの？」

「うん……これは……携帯用ディスプレイ……学園にしか……空間投影ディスプレイはないから」

「なるほど、私もそういうタイプの眼鏡をかければ変に見られないで済むかな」

「めいめーが眼鏡かー、似合いそうだねー」

「ISに乗る時は邪魔になるから置いてきちゃったから、どうしようもないけどね」

「……そろそろ夕食の時間」

「あつ、ほんとだー。かんちゃんありがとうー。えへへっ。今日の日替わり何かなー」

「うん。改めて、今日は二人ともありがとう」

「じゃあ、感謝の印に私たちに夕食を奢れー」

「ちよつと……本音……」

「大丈夫だよ、更識さん。それにこのままだと、私が心苦しいだけだしね」

更識さんは最後まで渋っていたが布仏さんが押し切り、夕食を奢らせてもらえた。

久しぶりに来た食堂はなんだか新鮮だったし、こうして誰かと一緒に食べる食事はいつもより美味しく感じた。

今日は何も考えず、ゆっくり休もう。

そう素直に思えたら、未だに肩の重みや全身の倦怠感はあるが、今まで気づかなかった全身の強張りがフツとやわらいだ。

勝ちたいと思つてがむしゃらにやってきたけれど、もう少し心に余裕を持っていなきゃダメだったかもしれない。

こんなコンディションでは出来ることも出来なくなってしまう。  
それを自覚して笑ったら、布仏さんと目が合った。そして、にへら  
つとしたいつもの笑みではなく、何処か慈愛を感じさせる表情を浮  
かべた。

どうやら彼女には全部お見通しだったらしい。

「二人とも……何を笑ってるの？」

更識さんがそう言ったのをきっかけにして、私と布仏さんは声を上  
げて笑い始めた。

「もうっ。何で笑ってるのか教えてくれないでしょ!？」

更識さんが私の前で初めて顔を真っ赤にして大声を上げたのを聞いて、私は涙まで出しながら笑っていた。

周りの生徒からの注目は全然気にならなかった。

あの日自覚した胸の穴は、今でもふさがっていない。

胸の奥で黒い沼がドブドブと音を立てて私の心を沼の底に引きずり  
込もうとしている。

私の心はそこに引きずり込まれたくなくて必死に走って逃げるけど、  
逃げることに必死になりすぎて今も同じところをグルグルと回って  
いるんだ。

でも、いつかきつと、その黒い沼から抜け出せる日が来ると思えた。  
今日のこのような光景さえ忘れなければきつと。

更識さんとも少しは仲良くなれたのかな。

明日の放課後は待ちに待った模擬戦だ。

今の私に出来ることは全てやった。後は勝つだけだ。

まずは、一夏を倒す。その後が本命、セシリア・オルコット。

必ず行くから待っていてくれ、オルコットさん。

### 第三話（後書き）

補足

「ヘルマフロデイトス」

元は男の神様。

彼に一目惚れした泉の妖精サルマキスが”彼と一つになりたい”と神々に祈った。願いは聞き届けられ二人の体は結びつき、ヘルマフロデイトスは男でも女でも無く、男でもあり女でもある体に変化した。

「アンドロギユノス」

太古に存在した、原初の人類の一種族。

原初の人類は、頭は二つで手足が四本づつあって、今の人間が背中合わせでくっ付いた様な丸い姿をしていた。男と男がくっ付いている種族。女と女がくっ付いている種族。男と女がくっ付いている種族。この三種族のうち、男と女がくっ付いている種族を「アンドロギユノス」と呼ぶ。

後に、この人類は神の怒りに触れて半身を引き離されることとなる。それが現在の人類の姿。

「テイレシアス」

元は人間の男の預言者。

強い預言の力を持っていたがために神に目をつけられ、”男と女ではどちらがより強い快樂を感じるのか？”という神の議論の実験台にされた。

まず男から女に変えられ、七年後に女から男に戻された。

## 第四話

なあ、ISのことを教えてくれるはずじゃ？　そう言っただけは傍らに立つ筈を見つめる。

ここは第三アリーナ、Aピット内。既に放課後になっており、もうすぐ李との模擬戦が始まるはず。

こんな直前になって今更言うのもなんだが、それでも俺は言いたくなかったのだ。

「……」

筈は俺から目をそらし口をもごもごとさせた後、キツ！と音がしそうなほど俺を睨む。

「しっ、仕方ないだろう！一夏のISだって届いてなかったのだから！」

そう、そうなのだ。未だに俺の専用機は届いていない。

「まあ、そうだけど……それでも、知識とか基本的なことかあったら？李みたいに訓練機借りるとかさ」

「……」

「だから目を逸らすな！」

「ええいつ！終わったことをぐちぐちと！試合に向けて少しは集中しろ！」

そう言われると、愚痴の科白も呑み込まなくてはならない気分になるから不思議だ。

俺はここ数日、筈にみっちり剣道の稽古をつけてもらっただけだ。ISを覚えてくれると言っておいてこの仕打ちは、いくら幼馴染でも一言言いたくなくても仕方ないだろ。

確かに俺の腕は錆ついていて、それを鍛えなおすのは分かる。IS操縦には操縦者の肉体を鍛えるのも必要だということも分かる。それでも一度もISについて教えてくれないのはどうということか。多少恨みがましい目で筈を見つめるぐらいは許されるだろう。

まあ、何とかなるか。

正直、俺はこの試合に乗り気になれない。元々クラス代表にはなりたくなかったし、李は巻き込んだだけだ。俺はセシリアを見返すことが出来ればそれで良いしな。

だから乗り気にはならないが。

「織斑くん、ようやく織斑君の専用機が来ましたよ」

「本当ですか、山田先生。って、どうしたんですか？そんなに疲れて」

「織斑。聞いてやるな。少し機体のことで研究者達とな……」

そう言つて、千冬姉えと山田先生が俺の専用機の到着の知らせと共に現れた。

「えっ！？何かあつたんですか？山田先生」

「うう、そうなんですよ。聞いて下さいよ。機体が到着したと思つたら研究所の人達が“これ分解バラしてもいいですか。いいですよね！！ホンの三日程度で終わりますからっ！！”って、言い始めて……。三日は直ぐじゃないですよ！！直ぐに使うんですよ！？織斑先生の説得にも耳を貸さないし……時間も無いし。大変でした」

「だから聞くなと……まあいい。とにかく時間が押している。すぐに準備しろ。ぶつつけ本番でものにしろ」  
「なんですとっ！？」

「この程度の障害、男子足るもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」

あの、筭さん？

「え？え？なん……」

「はやく！」

三人に急かされて、俺は搬入口に向かう。

そこに在ったものは『白』。

その機体は白く、何物にも侵されることなく白く、悠然とその場に存在した。

まるで主を迎える中世の騎士のように頭を垂れた姿で、英雄に抜かれるのを待つ聖なる剣の様にその場に存在している無機質な、それでも何処か不完全にも見える『白』。

これは、このISは俺を待ってくれていた。俺と一つになることで完全となる。そう自然と思えた。

「背中を預けるように、座る感じで乗れ。フォーマット 初期化と最適化は実戦でやれ。でなければ負けるだけだ」

俺は緊張か畏敬が高揚か、自分でもよく判らない震えと共に『白』に触れ、“繋がる”。

「これが……」

わかる。この機体は俺と一つになる。俺と共に在る。その存在に相応しい名前は。

「そう、織斑君の専用IS。その名も『白式』です！」

「問題無く機能しているようだな。一夏、気分が悪くなったりしていないか？」

世界が広がる感覚。さつきまでの生身が窮屈だと錯覚してしまいそうになる解放感。自分が物語に出てくる英雄ヒーローだと思える万能感。

「大丈夫だ、千冬姉え。むしろ絶好調すぎてヤバいくらい」

千冬姉えの声に反応して、改めて周囲を認識する。

千冬姉えの声に含まれる微かな心配の表れが震えとして解る。山田先生が新しい玩具を目にした子供の様に興奮しているのが伝わる。

そして。

「篝」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ、勝つてこい！」

篝の心配そうな、それでも俺が勝つのを信じてくれているのが、その些細な表情の動きから理解できる。

さつきまで乗り気じゃないなんて言ってたが、そんなことは言ってもらえない。

アリーナへ向かいながら思う。

そうだ、例え乗り気じゃなかったとしても。負けられねえよ。こんなに期待されてたら尚更な。

第三アリーナ、Aピット。

私は打鉄を纏い、一人静かに試合の開始を待っている。

先ほどまで、一緒に戦術を練ってくれた先輩や布仏さんや更識さんが様子を見に来てくれていたが既に観戦場に向かっているはずだ。クラスメイトには教室で一夏と共に激励された。

「もうすぐ……か」

静けさに耐え切れなくなつて眩き、首を動かさないと周囲を見渡す。ISのハイパーセンサーのお蔭で360度を「見る」ことが出来るが、この景色を見る度に私は“慣れないな”と思う。

普段肉眼で見るよりもより精細に見えるにも拘らず、私はこの景色に違和感を感じて何処か“窮屈”だと思つのだ。

ISを動かす時にもそう思つてしまう。

私はもつと動けるはずなのに、もつと精細に世界を見ることが出来るはずなのに、私のイメージと現実が合わない。

ISによつて世界をより高感度に、より身近に感じるのに、そう思えば思うほど世界が小さくなる。

これが専用機ではないからなのか、他の人も同じように感じるのか、ただISに慣れていないだけなのか、私は知らない。

だが、この違和感は子供の時からずっと感じていたものだ。それがISに乗って普段より強調されているだけ。

だから違和感自体は気にはならないが、この小さな世界を見ているとどうしても“窮屈”だと思わずにいられない。

だが、この窮屈さを我慢すれば世界はいつもより、より身近に、より近くで感じられる。

こうしてISに乗っている、世界を身近に感じる今だからこそ分かる。

勝ちたい。

そう、心の奥から思う。

だから

「全力で、まずは一夏を倒す」

行こう。そう思い、アリーナへ向かう。

「一夏、例え専用機が相手だとしてもこの試合は私が勝たせてもらうぞ」

「俺だって、負けられねえよ。信頼してくれている奴がいるからな、李、お互い全力だ」

アリーナ中央で互いに相対しつつ、言葉を交わす。

一人は貪欲に勝利を求め、一人は信頼を裏切らないために。

『それではこれよりクラス代表決定のため、織斑一夏対李明の試合を始める。両者準備はいいか？いいなら……始め！』

私は開始の合図とともに打鉄の拡張領域に入っているアサルトライフルを取り出し、一夏に狙いをつける。

「まずは……様子見からつと」

アサルトライフルの引き金を引きつつ、共に戦術を練ってくれた先輩の言葉を思い出す。

いい？専用機なんて言ってもこの学園に送られるような機体は、大体が特化型の実験機が殆どなの。だからまず相手の機体の特性を把握するべき

ある程度一夏から距離を取り、様子見に徹する。制限点射をしつつ、一夏を見る。

ダダァン！ダダァン！ダダァン！

引き金を引いてひたすら撃つ。だがそれを一夏は避けていく。動きは多少悪いが避けていく。

10回撃つて、2回は当たる。3回当たれば上々、4回当てれば運が良い。

この距離では当たらないか、当たっても殆どダメージは無い。が、一夏の攻撃にも対処できる距離、それを保つ。

彼はこちらの射撃を回避しつつ、近接ブレードしか出してない。こちらの弾が殆ど当たらないのは私自身の腕の悪さもあるので想定内だが、遠距離用の武装を展開しないのは何故か？

何か作戦があるのか、それとも他の武装が無いのか、私には判断できないが……。

「どうした、一夏。近接ブレードを出しただけで反撃もしないのか？それがお前の全力か？」

「くっそ、そんなこと言われても武器がこれしかないんだからしょうがねえだろ！それに李の攻撃だって殆ど当たってねえぞ！それに距離を詰めればこっちのモンだ！」

どうやら一夏の機体は近接特化のようだ。ということはお向こうから近付いてきてくれる、それは私にとってもやり易い。

李君もだけど、織斑君も初心者。ということはISの機動自体は分かり易いものになる。特に近接攻撃をするなら一直線に向かって来るか、迂回するとしても複雑な機動は出来ない

「うおおー」

一夏は私の射撃の腕に気付いたのか、宣言通りにブレード片手に多少の被弾覚悟で、片腕で防御しつつ突っ込んでくる。

私は想定通りのこの状況について笑みをもらし

「なっ、逃げるのかよ」

背を向けて逃げ出した。

一夏に背を向けて、まるで鬼ごっこの様にアリーナを縦横無尽に逃

げ回り一夏の専用機『白式』の機体性能を見させてもらう。

一夏の専用機『白式』は、流石に近接特化の為か加速が早い。だがその加速力を持って余しているのか、小回りはそれほど速くは無い。

「逃がすかよ！」

それでも流石に機体性能の差がある為にすぐにでも追いつかれそう  
だ。

「もらったー」

予想通り、一夏はすぐに追いつき背後から容赦なく斬撃を放つ。

その姿を、後ろを振り返ることなくハイパーセンサーを通して確認  
する。

「誰が逃げるだけといった？」

そう言い放ち、私は背部にあるスラスタを壊されない様に即座に  
反転、手に持つ武器を一夏に向ける。

「なっ!？」

先ほど持っていたアサルトライフルではなく、今の様な近距離に適  
したショットガンを放つ。

「くっ、やるっ！」

だが一夏もただやられるだけでなく、ダメージを軽減させるために  
咄嗟に半身になりつつ私に攻撃を届かせる。

逃げ出した瞬間にアサルトライフルの展開を解除し、背後を見せて  
いる間にショットガンに持ち替える。

そこで一夏が追いついてきたところをカウンターで攻撃するはずが、  
《白式》の予想以上の加速と一夏の機転により痛み分けとなつてし  
まった。それでもショットガンをもろに受けた一夏の方がダメージ  
は大きいはずだ。

「なかなかやるな、李。でも、俺だつてこの一週間等に鍛えてもら  
つてたんだ。そう簡単にやられるわけにはいかねえ！」

「私だつてこの程度の小細工で勝てるとは思つてないさ。これから  
だ」

戦いは依然始まったばかり。

「ほう、李はなかなか考えてるじゃないか。と言っても相手が一夏素人だからというのものもあるのだろうか」

「そうですね、ただ織斑君も思いつきりの良さは中々だと思えますよ？今のところは互角ですし」

「機体に振り回されているだけだ。技術的にも大したことは無い。だが、ふむ。ここ一週間ほど誰かに鍛えなおされたようだからな。それで多少は喝が入ったのだろうか」

そう言つて隣に立つ篠ノ乃をチラッと横目で確認する。

篠ノ乃は試合が始まってからずっと無言だ。その顔には様々な感情がせめぎ合い、結果としてモニターを睨むという表情になっている。

「でも、変ですね。資料に載っている通りなら李君もてつきり近接装備で勝負するかと思つてたんですが」

「出来るものならな。恐らく、『白式』が近接特化の機体だと見抜いて待っているんだろうさ。あれに真正面から立ち向かうには李の腕も機体性能も足りないからな」

「待っている、なら、まだ作戦が？」

「そうだろう。恐らくこのままだと弾切れか、もしくは一夏に対処法を見抜かれてギリ貧だからな。にも拘らず出し惜しみをするのなら一回限りのでかいのをやるつもりだろう」

「まだまだ勝負はこれからですね！ちなみに織斑先生はどちらが勝つと？」

「さて、な。織斑は機体性能で、李は作戦で戦い、互角だが……このままいけば『白式』の最適化が終わつて一次移行ファースト・シフトするだろうからな。更に性能が上がるはず。それまでに李が勝負を決めるか、若しくはそのハンデさえ乗り越える作戦を用意してあるのかが分かれ目か」

「ということとは織斑君の方が優勢、と」

その言葉を漏らした山田君の声は、気落ちしているようだった。

「なんだ？山田君は李に勝って欲しいのか？」

「いつ、いえっ！そういうのじゃないんですけど……李君の頑張りを間近で見ていたので……その、決して弟さんに負けて欲しいとかは……ですね？」

そういえば山田君は李に途中までISの実習を教えていたな。

「くくくつ。分かっているさ。だが、まあ。努力だけで勝てるほど私の弟も弱くは無いぞ？」

そう、私の弟なのだから。

せめて心の中だけでも勝利を祈らせてもらっぞ、一夏。

強い。

素直にそう思える。

例え動きを先読みしても、即座に対応してくるその機転。確実に間合いを測り、一瞬の隙を突いてくる思い切りの良さ。

既に私のアサルトライフルの弾は無く、打鉄の基本武装の近接ブレードでやり合っている。

一夏は最初にあった動きの悪さも今は無く、機体性能差を利用した攻撃で私を圧倒している。

私の中にあつた作戦は既に切り札を残すのみとなっている。

故に互いに何の技巧も無くただ真正面から突撃し、ブレードを打ちあうのみ。

互いにダメージを与えてはいるがそれも決定的なものでは無く、それでも私が劣勢なのは傍から見ても明らかだ。

こんな状況で私は思う。

ISという、この“窮屈”な世界で一夏と刃を交わし、想う。

ああ、私は……。

私の価値を示すだとか、オルコットさんに認められたいとか、そん

なことは建前だ。

いや、その気持ちは確かにあるがより大きな感情が占めている。

この試合は、ただ、ただ、お前に、篠ノ乃さんの隣にいられるお前に嫉妬して、八つ当たりをしたいだけだったんだ。

貴女に……。

ただお前に勝って、私の方が優れていると篠ノ乃さんに示して、私を見てもらいたくて、選んで欲しかっただけだったんだ。

貴女だけに見てもらいたいのに……。

私には一夏に勝つ事しか出来る事がなくて。

なのに、それは既に遅く、叶わなくて。

自分が惨めで情けなくて。

貴女に私だけを見て欲しかったのに……。

だから一夏よ、お前を倒すのは、セシリア・オルコットの前に立つのは私だ。

あの誇り高い、セシリア・オルコットに認められるのは私だ。

貴女は既に一夏を見ているから……。

せめてそれぐらいはさせてもらうぞ、一夏。

だから……。

私は切り札を切る覚悟を決めた。

これはただの嫉妬だ。

「勝たせてもらうぞ、一夏」

勝たせてもらうぞ。

そう、李が言った気がした。

既に互いの機体には細かな傷が入り、シールドエネルギーも三分の一残っていればいい方だろう。

そろそろ勝負を決めに来ると思っていた時にそんな声が聴こえた気がして、俺は怪訝に思っただけで一旦距離を置こうとした瞬間。

ゴウツッ！つと李が突っ込んできた。

今までとは違う呼吸、間合い、気迫で、一直線に向かって来る。なんだと！？ 声を出す暇も無く俺はブレードを構える。

既にお互いの機体に触れられるほどに李は近付いていて、俺の思考は置いていかれている。

だが自然と身体は動き、筈に教えられた型で突撃してくる李の左手を迎え斬っていた。

李も驚いているのかブレードの刃の軌道が僅かに逸れ、俺はその斬撃を運よく回避する事が出来た。

しかし俺の斬撃は、李はあろうことか左手の装甲で真正面から防御し、そのまま俺の横を擦り抜けていく。

李の左腕部の装甲は俺の斬撃で吹き飛んでいく。それを見ながら李の攻撃が回避できたことに安堵していると……。

何故？ 今度は思う暇さえ無く、俺は背後からの衝撃を受けた。その勢いそのままアリーナの壁に激突し、ダメ押しとばかりに左半身に銃撃を受けた。

「くっ。いつたい何が……」

追撃は来ないのか、もしくは出来ないのか。

ともかく俺は突然の背後からの衝撃とその後の予期せぬ銃撃によって混乱した頭を整理出来る時間を得ていた。

恐らく背後からの衝撃は擦り抜けたと思った李の攻撃で間違いないなら、ダメ押しの銃撃は？アサルトライフルは既に弾が無いのは判

つてる……そうかつ！ショットガンか？あれならまだ弾が残っているても不思議じゃない！

俺はISの生体補助機能によって脳内麻薬を分泌して混乱する頭を強制的に治める。

だが頭は冷えても大ダメージを受け、さらには先の李の一撃で背部スラスタや左腕部がやられたらしく反応が悪い。

むしろ未だにシールドエネルギーが残っていることに感謝するくらいだ。

あの筈との剣道特訓が無ければ既に負けていただろう。あそこで李の左腕を攻撃できたからこそ、未だに立っていられる。

「やってくれるな、李。まさか肉を切らせて骨を断つ、をやられるとは思わなかった」

「私だつてやりたくは無かったさ。だけどこうでもしないと勝てそうになくてね。でもそのかいはあっただろ？」

ここに来てのこのダメージで、試合の行方は完全に李の勝利だと皆思っているのだろう。

「けど甘かったみたいだな。まだ俺は倒れていないぜ。それはきつとこの《白式》だつて同じだ」

そう言つて俺は先ほどから頭に送られてくる膨大なデータと共に出ているウインドウの確認ボタンを押す。

キイイーンという甲高い音と共に周囲を塗りつぶす『白い』光があふれ出す。

そうして白い光と共に現れたのは、先ほどまでのダメージなど知らぬとばかりに消えている《白式》だった。

それはさつきまでの機体と違い、完全に俺専用になった《白式》。

最初に“繋がった”時よりも遥かに強い解放感がある。これを知つてしまったら、さつきまでのがまるで子供だましの様だとさえ思つ。

最初の工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な、より騎士に近い姿へと変化した《白式》。

何より変わったのは右手に持つ武器。

近接特化ブレード・《雪片式型》

俺はこいつとなら勝てる。こいつが力を貸してくれるなら負けられない。

それは、その名前は昔姉に隠れてみたモント・クロッソIS世界大会の映像にて振われた姉の力の代名詞ともいえる名前。それが雪片。

……ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

そう言つて俺はわざわざ首を動かして千冬姉えと筈がいるだろうB

ピットの方向を見る。

この雪片の名を冠した、太刀を模したブレード《雪片式型》。世界と戦い勝利してきた姉の力、それが今俺の手に在る。

「それに俺を救ってくれた幼馴染もいる」

そして……先の李の一撃。

あれは本来なら反撃も許されずに俺は負けるはずだった。それを救ったのは箒との特訓。あれによって、忘れていた動きを再び身体に叩き込んでくれたからだ。

俺は、ずっと姉に守られていた。この試合では幼馴染の箒に助けられた。だけどこれからは……。

「俺が家族を守らなきゃ、箒を助けなきゃいけないよな」

「一夏、お前何を……？」

なら、なおさら負けられない。いや、彼女たちの為にも勝たなければならぬ。

「とりあえず、今は千冬姉えの名前を守るさ」

元日本代表の、世界最強の、その弟。その姉の、《雪片式型》という姉の力を持っていて負けるなんて格好がつかない。そうあの姉の、あの格好いい千冬姉えがカッコ付かないなんて冗談もいいところだ。しかも笑えない。

「というか、逆に笑われるだろ」

苦笑し、相手を見上げる。そこにいるのは左腕部の装甲がはがれ、先の突進で無理をしたのか背部のスラスタは不規則に炎を吹き上げ、他の部分も傷だらけの、それでも俺に相対し刃を向ける李の姿。俺とは違う、保護すると言われ訳も分からず学園に入れられ、状況に流されるようにこの試合に臨んでいた俺とは違う姿。

学園に来た理由は知らないが俺と大して違わないだろう。だけどこの試合が決まってからの態度は俺とは違った。

李は全力だった。俺も努力はしたがそれでも李の様な鬼気迫るような努力じゃなかった。一人だけ訓練機で、それでも勝つ為に全力を尽くしていた李。

どこかで俺は『無理やりやらされている』って逃げ道を作っていたのかもしれない。でも今、その逃げ道は使えない。俺の手には千冬姉えの力が、俺の身体には篝の技が、在るのだから。

俺が無様で笑われるのなら納得できる。だけどあの二人が俺のせいで笑われるのは納得できない。

「だから、俺はお前に勝つぞ。李。勝ってセシリアにも認めさせてやるんだ」

笑いながら、この思いに気付かせてくれた李に俺は向かって行く。

獲った？。

切り札を切り、一夏の機体にダメージを与えた俺はダメ押しの後ショットガンの弾を放ちつつ勝利を確信した。

ISのシールドがいくら優秀でも許容量以上のダメージが入れば機体は損傷する。私は姿勢制御に使われているスラスターに対してそれを実行したのだ。

本当は《絶対防御》を発動させてそのまま勝負を決めるつもりだったのだが、一夏の予想外の逆撃に合い左腕部の装甲と引き換えに背部スラスターを頂くことになった。

本当に一夏は強い。

だがこれで私の勝利は確実だろう。《白式》の背部スラスターが損傷したのなら唯一の攻撃手段である近接ブレードをまともに振ることも出来ないのだから。

それを思えば先の一撃の為に打鉄の限界を超えた速度のせいで私の機体にガタがきているのも許容できる。

そんな状況でも一夏は、《白式》は未だ勝利を諦めていない。それどころか。

「だけど甘かったみたいだな。まだ俺は倒れていないぜ。それはきつとこの《白式》だって同じだ」

そう言い放ち、光と共に現れる。

先ほどまでのボロボロの姿とは違う、優美な曲線を描いた“真白”と形容すべき傷一つない機体と完全に一つとなって。

淡い光を纏いながら、彼はまるで物語の主人公ヒロイの様に現れた。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。それに俺を救ってくれた幼馴染もいる」

一夏はその手に持つブレードをチラツとみた後に首をピットの方向に向ける。

その仕草が私を無視しているようで、まるで眼中にないかのようである。

「俺が家族を守らなきゃ、箒を助けなきゃいけないよな」

そういった、彼の顔を見て少なからず私は動揺した。

「一夏、お前何を……？」

「とりあえず、今は千冬姉えの名前を守るさ」

私がグルグル迷って、嫉妬している間に、同年代の彼はすでに覚悟をかためていたのだ。

「というか、逆に笑われるだろ」

この世界ISで生きる覚悟を。

「だから、俺はお前に勝つぞ。李。勝ってセシリアにも認めさせてやるんだ」

そう言っで一夏は一步を踏み出し、向かってきた。

夢を……夢を見ている。

黒い人影が周りを囲み、誰かを称賛している夢。私はそれを離れた所から見ている夢。

黒い影を引き連れ誰かは私を見ることも無く何処かへ行く。行ってしまう。

誰かを追いかけて必死に走るんだけどすぐに追い付けなくなってしま

い、見失う。

僕はそれでも走って、走って、走る。

ただ誰かに追いつくことも見つけることも出来なくて、いつしか僕は走るのをやめてしまう。

そしてそこから動くことも出来ずに僕はうずくまる。

そんな夢を見ていた。

「ここ……は……」

見慣れぬ天井がみえる。

「起きたか」

織斑先生の声が聴こえる。その声と共に先ほどまでの夢の事を忘れ辺りを見渡す。

「ここはピット横の更衣室だ。お前は一夏の攻撃を受けた後意識を失いここに運び込まれた。意識を失っていたと言っても10分程度だ。身体の変調などはあるか？」

織斑先生に聞かれ、私はあの試合を思い出す。

一夏の攻撃を私は何とか捌くがそれでも10合も打ちあわないうちに負けてしまった。たしか最後は……。

「いえ、大丈夫です。それより最後に一夏のブレードが光っていましたがあれは？」

「あれは《白式》の単一仕様能力の《零落白夜》だ」

「なるほど、単一仕様能力ですか……」

「それはそうと、お前の打鉄。あれの突撃法は誰かに教わったのか？」

「いえ、世界大会の映像にあった加速法を自分なりに再現したものです。ただ、どうやっても再現できなかったのでスラスタを過剰稼働させることで代用しましたが」

「ふん、そんなところだと思っていたが……ホントにやっていたと

は呆れたやつだな。いづれあれは教えるからもうやるな。危険だ。これはその罰だ」

織斑先生はそう言い、出席簿を振り上げ私の頭を叩く。

……音はしなかった。

「それと今から織斑対オルコットの試合が始まる。今から観客席に行くのも辛いだろうからここで見ていても良いぞ。ただ私はピットで待機しなければならんから出ていくが」

「わかりました。ありがとうございます」

織斑先生の用事はそれだけだったのか、そのまま出口に向かう。

「ああ、それとあの試合。技術も見切りも作戦もお粗末なものだったが……あの突撃以外は……良い試合だったぞ」

今度こそ織斑先生は出て行った。

反則だ。

一夏とオルコットのさんの試合が始まった。

オルコットさんは4機のビットを操作し、一夏相手に優勢に試合を進める。

あんな風に急に言っただけで来るなんて。

だが、一夏もビットの攻撃を避け、癖を見つけたのか2機落としてつオルコットさんに近付いて《零落白夜》を当てる。

オルコットさんも代表候補生の意地を見せてミサイル型のビットも出して対抗する。

準備も覚悟もさせてもらえない。

オルコットさんはこれ以上ビットを壊されない様にレーザーライフルの射撃と共にビットを操作し、一夏が近づいてきたらミサイルを当てる。

一夏はビットとライフルのレーザーを《零落白夜》で防ぎ、果敢にオルコットさんに斬撃を放つ。

私は顔を上に向け、試合を映す画面を見る。

ただどこには誰もいないから。

下唇を噛み締め嗚咽を漏らさない様に、画面を見上げる。

オルコットさんの奮戦むなしく、一夏の《零落白夜》がもう一度決まった。

そこでオルコットさんのシールドエネルギーが切れて試合が終わる。どうやら勝負は一夏の勝利で幕を閉じたようだ。

「ぐっ……うう……ぐすっ……」

ああ、私は負けたんだな。

私はこの学園で初めて声を上げて涙を流した。

「さいつていですか？ 貴方のことを見損ないましたわ？」

その言葉と共に私の視界は右を向く。

後からじんわりと痛みが奔る、そんな衝撃を私は受ける。

そんな火曜日の朝。

「神様なんて死んでしまえ」

スパゲティを食べながら《空飛ぶスパゲッティモンスター》にむかってそう呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6534z/>

---

IS あるオリ主の物語

2011年12月29日03時53分発行